第１３回スポーツ・ボランティア・リレートーク　レポート

２０１２年3月１５日（木）　２０時より２２時
仙台市市民活動サポートセンター　セミナールーム
参加者　２３名
「仙台・宮城スポーツの今
～　２０１２年　宮城のサッカー　これまでそしてこれから
宮城県サッカー協会　理事・宮城テレビ　キャスター
竹　鼻　　純　　氏

< あいさつ >

本日は遅い時間に多くの方に集まっていただきありがとうございます。私は宮城テレビの竹鼻です。失礼して座って話しをさせていただきます。前回お話しをしてから１年と３ケ月ということで、いつもは私のほうから一方的にお話しをして終わるという形ですが、今日は短く話してみなさんと出来る限り意見交換したいと思います。

< 今の宮城のスポーツの状況 >

以前にもお話ししたと思いますが、ベガルタができるまでの間は全国を舞台に活躍するスポーツというのは社会人野球くらいでしたが、今はさまざまなスポーツがあります。
仙台ベルフィーユという女子バレーボールのチームが誕生し、まもなくハンドボールのチームができます。もちろんベガルタレディースが今シーズンから活動し、そしてプロ野球の楽天イーグルス、陸上、さまざまな社会人チームもがんばっています。震災で苦しい状況となったバスケットの仙台８９ＥＲＳも頑張っています。プロスポーツから企業スポーツ、仕事しながらのアマチュアスポーツまで本当にいろいろなチームが増えました。(これだけ増えると)宮城の規模ではたしてどこまでこれらのチームを支えられるのかが課題となります。特に仙台ベルフィーユは亡くなられた米田さんありきだったので非常に心配です。もともとバレーボールはホームアンドアウェーでやるものではなく、全国各地でゲームを行うことや入場料収入がチームに入らない仕組みのため、地域でがんばろうというチームが根ずくには厳しい仕組みになっています。選手は今働く場所は確保できていますが、今

後お金がかかる部分があるので心配しているところです。希望は宮城は全国的にもバレーボールの人気が高いということですが、どうなるのでしょうか。

企業チームもありますが、バトミントンの七十七銀行では本業の仕事にも通用する、という条件で選手をとっているため、トップリーグの上位にいけるかは難しいところもありますが、これはこれで一つのあり方とも思います。

89ERS は現在プレーオフぎりぎりの状況です。仙台市体育館での観客がもう少し入らないと経営的にも厳しいはずで、最低でも 3,000 人以上を動員できるようになってほしいところです。JBL と bj リーグの関係も難しいものがあります。また、バスケット好きから外に広げることが困難なのは外国人選手が定着しないことだと思います。外国人選手はまずNBA、次にヨーロッパでプレーを希望しているため、そのあとが日本などであり、選手はより上をめざすためひとつのチームにとどまりません。そのことが bj リーグ自体か抱えている問題で、地域になじみにくいシステムになっていると思います。決して外国人選手のレベルが低いわけではないのですが、まず８９ＥＲＳについては今年一年とにかくやりきることが大事です。

これだけ多くのチームか仙台に集まるきっかけはやはりベガルタの成功だったと思います。それが楽天イーグルス、仙台 89ＥＲＳ、ベルフィーユなどが仙台を選択した理由だと考えられます。こうした全国をめざすトップチームの設立がスポーツを楽しむ環境に大きく貢献していますが育成年代の普及、強化に対する貢献度がまだまだ十分ではないという点は大きな課題です。今後ぜひ地域の子供たちにトップチームの選手をめざすというモチベーションを与えられる存在になってほしいのです。いつも言いますが宮城県は、2001 年の国体開催以降、都道府県順位がしばらく 10 位台と健闘していたのが、ついに 20 位台に落ちてきています。（国体の順位はあくまで一つの目安に過ぎないのですが・・・）

宮城のサッカー界

サッカー界も去年の東日本大震災で大変な影響をうけ、指導者や子供も犠牲者が出ました。沿岸部のほとんどのチームは大変に大きな影響をうけ、文化施設もそうですがスポーツ施設も被災していますが、これだけひどい状況だと自分たちのところを（つまりスポーツ文化施設を早く）直してくれとはいいにくいというのが実情です。そのことが復活を送らせている原因になっています。石巻には立派な芝の広場がありましたが自衛隊の基地となるために砂利を敷いてしまったので使えなくなっています。現在は仮設住宅が建てられグランドがなくて困っているといいます。仮設住宅は２年となっていますが延長する可能性も高く、コバルトーレ女川がサッカーをしていた総合運動公園も仮設住宅がたっています。そんな状態の中でも小中高校年代のチーム数はほとんど減りませんでした。全日本少年サッカー大会もいったんは中止となったのですが、少年のチームの側から要望がでたことと、宮城よりひどい福島がやるということで開催することとなりました。

一番深刻なのが社会人のチームで、県内の一種の 160 チームはほとんど大会を開くこと

ができませんでした。今年から再開する予定ですが 30 チームぐらいは活動をやめる可能性が高い状況です。特にクラブチームなどは練習会場もなく被災したことで減るような状況があります。今年は復興元年などといわれていますが、なかなかもとに戻るのは時間がかかる状況なのです。ただ、ありがたいことに震災後全国のサッカー関係者から支援物資が送られてきました。サッカー協会は 3 人しか専任がいないので、実際にはその支援物資をわけるのが本当に大変でした。中には九州からトラックで運んでくれた仲間もいて、一度だけ塩釜 FC と対戦したという人が物資をもってきてくれたというケースもありました。それに加えて岩手出身の小笠原選手が復興支援に立ち上がり東北にかかわった J リーガーに呼びかけて、何千万単位のお金を寄付していただいたりもしました。サッカーは、スポーツは直接被災者に何ができるわけではありませんが、利府の県サッカー場を会場にサッカーで遊ぼうというイベントを開き被災地からこどもたちに来てもらった際に、（避難所暮らしの）こどもたちが震災以来初めてのびのびとサッカーをしたということでその笑顔が忘れられません。そのときにスポーツはこんなことができるのだと強く胸に感じたところです。

今までサッカー協会では 10 年構想を作っていました。今回新たに 6 月を目標に第二次 10 年構想に作り替えることとしています。その構想のひとつに震災からの復興を掲げて、かなり長期の取組を考えています。

ベガルタ仙台は約 33 万人の署名をあつめて生まれましたが、一方で育成部門の強化にはつながっていないのが現実です。国体の東北予選を勝ち抜けない、ベガルタのユースが全国リーグなどにもいけず、今シーズンは二部におちています。
それはベガルタだけではなく、県サッカー全体の問題と考えているのです、チームと協議し去年から育成のシステムを変えているところですが、その効果はまだあらわれていません。ベガルタのスタッフと県の強化育成のスタッフがフランクに意見交換する関係になることが大事だと思っています。

ベガルタができたことでサッカー協会としてはサッカーを愛する人が増えたのはうれしいが、それだけではまだまだ道半ばであると思います。今後クラブライセンス制度ができるとユース出身の選手を規定の枠分いれなければなくなります。また、現在のクラブの予算規模から他から高い選手をひっぱってくることも難しいのが実情です。となれば県内の若い選手を育てることがますます大切になってくるのです。

女子サッカーについて

女子は高校の女子サッカーの数はかなり多くなってきています。ただ中学校で女子のチームが少ないのでサッカーをやれる環境(小学校は男の子といっしょでもいいが)を作りたいと思っています。

ベガルタレディースは選手たちの経歴をみるとやれそうな気がしますが、まずは常盤木といい勝負ができればトップリーグへの道がひらけるでしょう。従来圧倒的に恵まれた東

京電力マリーゼで活動していた選手たちが、現在仕事をしながらサッカーをすることではたしてどれだけやってくれるのかはわかりません。今のところスポンサーも応援しているようなので運営的にはいい環境になっています。いつか、常盤木の子供たちがベガルタレディースにいきたいと思うようになればいいですね。今のなでしこリーグのブームのうちに確かな基盤をつくればがんばっていけるはずです。県サッカー協会としてもベガルタ仙台に女子チームをと提案していただけに、なんとか応援したいと思います。

ベガルタ仙台について

ベガルタ仙台については、今年はちょっと心配です。昨年は所属する選手を考えれば 4 位という素晴らしい成績を挙げただけに、サポーターのみなさんなどがそれ以上を（求める）ことになるので大変だと思います。戦術的なことをいえば、去年は点がとれなかったため今年はディフェンスラインをあげて点をとろうとするのは当然のことですが、そうすると今年は失点が増えることも考えられます。だから意図したように得点がとれるかが課題となります。これは今季は守りもと言っているガンバ大阪と逆のアプローチになっています。

去年 4 位の要因は一にも二にも攻守のバランスがよく、攻守の切り替えが速かったことと、堅守速攻というが意外に速攻のパターンが多彩だったこと。そしてマルキーニョスがいなくなったことがプラスに働きました。もともとベガルタというチームに突出した選手はあわないと思っていました。結果としてマルキーニョスありきのチームにならず一人ひとり自分がやらなければとなったことがプラスに働きました。チームの一体感は日本のチームは世界のどこにも負けません。これはなでしこも同じで、日本は各選手のタイプをお互いが理解しほかの選手をいかしてやろうという意識が強いのです。その一体感が J リーグのチームの中でもとくにベガルタは強いと思います。あとは気持ちで勝つという非論理的なことですが、これを論理化するとあきらめないで追いかける。また、間に合わなくても走りつづけること、その結果スペースが生まれたりするということだと思います。こうしたひた向きなプレーでベガルタは勝利をつかんできました。それが気持ちということであり、それが震災メンタリティだったのかもしれません。

いくつか例を挙げると赤嶺は献身的なセンターフォワードで、かなりディフェンスが助けられています。あれだけ動いて 14 点はすごいことだと思います。追い込むという、一番最初の作業を赤嶺がやっているのです。あと個人的には富田の読みが素晴らしく相手選手とからんでボールをとるという能力が高いと思いました。これで展開力がつきミドルシュートが枠にいけば代表にもつながるはずです。今、リャンがけがで不在のためゲームを組み立てる選手がいないので、それを富田ができるようになればますますベガルタは強くなるでしょう。サッカー関係者の立場でベガルタにどうしてほしいかといえば基本的に 10 位以内を守り続けてほしいと思います。そうすれば何年かに一度は優勝を争うことができるでしょう。実は日本のように戦力に差がないリーグは世界的には少なく、常時、10 位以内

にいればそのうちチャンスがあると思います。今ちょっと心配なのは年齢構成で、昨年のレギューラークラスは一番いいときの年代がそろっています。ですからこれから若い選手の育成は大事なことになります。

　気が付くと随分お話ししししてしまいました、本日はこのあたりで終わりにしたいと思います。